

俺は普通なので逃げたいと思います、生き残ればいいんだよ！

椎名叶

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転生したら鬼殺隊に入るよね？

俺は入らないけど。だって怖いじゃん、鬼。俺の考えは普通だよ、周りがおかしいんだよ。なので逃げます、生き残れば勝ちなんです。

という考えで逃げる少年を何故か全力でスカウトする鬼殺隊と追いかける鬼サイドの物語。

※自己満足の二次創作&アニメ勢にはネタバレでしかないのをご注意を。

※タグ追加&タイトル変更致しました。前は「俺は普通なので逃げます、生き残ればいいんだよ！」です。ご迷惑をおかけします。

目次

逃げ、逃げ、逃げ、それが最善。	1
蝶と隼の鬼ごっこ	4
お待ちくださいっ！教祖様ああ！	8
あ、出て行っていい？え？付いてきて？嫌アアア！	13
隼の弟	18
隼の引く血	22
これが俺の呼吸だああ！って、え？最終選別：!?	27
最終選別っ！——こんにちは手鬼さん！	31
さよなら手鬼、さよなら鬼殺隊！って、お館様このやろおお！	35
娘さんを俺にください！ってちやうわああ！	41
やったあ今日から自由の身！	46
雪景色の中に、ポツンと一軒家。	50

逃げ、逃げ、逃げ、それが最善。

やあこんにちは。

俺は『隼』、これで『はやと』って読むんだぜ？俺はとてもいい名前だと思うよ。

読み方を変えるとハヤブサって読めるんだよ、速そうな名前だろ？
——ところで鬼滅の刃って知ってるかい？

うんうん、知ってるよね、じゃあ皆はもし鬼滅の刃に転生したら何がしたい？

：やっぱりそうだよ、鬼殺隊に入ったり主要キャラと会ってみたいらしいよね。

でも考え直してほしいんだよね、鬼がいるんだよ？鬼が。

実際会うともう無理だよ、うん。

え？知った口で言うな、だって？

ああ、ごめんね、言うのを忘れていたよ、俺は鬼滅の刃の世界に転生したんだ。

いいなあ、羨ましいなあ、だって？

ははっ、馬鹿なことを言わないでくれ。俺はもう泣きそうなんだぜ？いや、もう泣いてるけど。

実際鬼を見ると鬼殺隊に入るなんて気は失せるさ、だって「人間だああ！」とか叫んで追いかけてくるんだぜ、恐怖でしかない。

まあ俺が何を言いたいかって言うと、夢ばかり見ずに現実を見ろ、それだけさ。

はー、眠い。

眠気と戦いながら夜の誰もいないガランとした町を歩く。

眠いなら寝ればいいんだだろうけど今日は寝れば捕まりそうだからね。

あ、別に悪いことはしてないよ？地獄にはいきたくないからね。

誰に捕まるかって言うと鬼殺隊士、だね。

いやあ、理由はわからないんだけど追いかけてるよね。

ほんと、世の中物騒だよ。怖いったらありやしない。

未来の日本は平和なんだなあ。って考えてみたり、家族のことを考えたりしていると肩をポンと叩かれる。

「あの、すみません。貴方に少し用事があるんですが…。」
「なんでしょーか。」

そう言いながら振り返り俺は硬直して、絶望する。

そこにいたのは胡蝶カナエ、胡蝶しのぶだったんだから。

俺は一步、後退る。

「少しついてきてほしいんですが、よろしいでしょうか？」

姉の方は笑顔でそう言うが後ろで睨んでいる妹の方が怖すぎて俺は頷く。わけないよね。

「すみません、俺は用事があるんでこれで。」

「え、あ、待って。」そんな声が聞こえたけど俺は完全無視で走る。

鬼殺隊士に追いかけてられる理由はわからないけど絶対ろくな事じゃないので逃げます、全力で。

それも相手は柱と、柱の卵だぜ？全力で逃げよるよ、いつも全力だけどな！

「ちよつと待ってください！」

「嫌です、待ちません、絶対にいいい！」

どんなに推していたキャラでも俺は待ちません、絶対に。

「少しだけ話を聞いてください、お願いします！」

俺は全力で首を横に振る。

「ほんとに、お願いします…！」

「嫌ア！どうせ俺を鬼殺隊本部に連れて行くつもりなんでしょ！」

「ツ！」

あ、凶星でした？

俺なんか特殊能力ある？

「お願いです、少しだけでいいので！」

「一秒だけならいいよ！」

そう言っつて一秒止まってまた走る。

「そう言うことじゃなくて…！」

「こっちは着物で走ってるから疲れるんだよ！そろそろ諦めてくれ！」

「そっちこそ、ですよ！しのぶー！」

その声と共に俺の前に妹の方が現れる。

うっそだろ、まじか。

でも俺の鍛えられた反応速度なら…！いや、無理やり鍛えられた反応速度だけど！

俺は足を滑らせ、妹の股下を抜けて直ぐに体勢を戻して走る。

後ろで驚きの声が聞こえる、俺の素早さと反応速度を舐めないでくださいね。

「理由は知らんが、お偉いさんに言っとけ！俺は何があっても鬼殺隊に入るつもりはない！」

多分、と小さく後付けして懐からある物を出す。

それを地面に投げつけると白い煙が周囲を包み込んで視界を阻む。

秘技、煙玉！ってね。

その煙の中を俺は駆け抜け、二人の追手から逃げきった。

はー、疲れるう！

それにしても鬼殺隊本部に連れて行くなんて言う理由で追ってきたのかあ…。

やっぱり世の中物騒だわあ…、にしても俺に何の用があるのかね、カリスマ性が高すぎるお館様は。

明日は風呂入ってゆっくりできるといいなあ。空気読んで出てこないでくれよ、鬼殺隊士と鬼さんよ。

蝶と隼の鬼ごっこ

町を転々としてあらゆるものから逃げている俺ですが今日はゆつくりできそうです、多分。

今の時間は正午、つまり十二時。

腹が鳴る時間、別に金が無いわけでもないのに目に入った飲食店に足を踏み入れる。

「いらっしやい。」

そう言っただけに微笑みかけお冷を渡す店員に俺は品書きを見て目に入ったものを適当に頼む。

俺は適当に席に座り、頼んだものを待つ間俺は渡されたお冷を呷る。

うつま。

炭酸系よりも水の方がいいわ、水最高。

久しぶりに冷えた水を飲み、水のありがたさを再確認した俺の目の前に頼んだ料理が置かれる。

ありがとう、と礼を言っただけものを口に放り込んでいく。

いやあ、和食が一番だよな。

鬼と鬼殺隊士は嫌だが飯だけは良い、飯だけは。

そんな事をぐちぐちと考えていると箸が何も無い皿をつついていたことに気づき、箸を置いて席を立てて会計を済ませ店を出ようとする俺の肩を誰かが掴んだ。

その腕を払うように俺は後ろに振り返る。

「久しぶりですね。」

おいおい…、マジかよ。

なんで、胡蝶しのぶがいるんだよ…！

私は少し前、上からの指令で姉さんとある男を追いかけていた。

接触はできたものの見失い、失敗に終わった。

私はその日から鍛練の時間を増やした、全集中の呼吸を習得してい

ない一般人のくせに私たち二人から逃げきった、それにイラついたから。

そして私は決めた今度会ったら絶対捕まえてやる、と。

私は町を歩いていた。と言っても任務までの時間を潰していただけだが。

お腹がすいた、ふとそう思い目に入った店に入る。

そこで私は顔をしかめて顎に手を当てる。

あの男は、姉さんと追いかけた男よね…？

着物の柄は違うがああ男だろう。

私は一瞬、鴉で伝達するか迷ったがバレては元も子もないので意を決し、店を出て行こうとする男の肩を掴む。

それを振り払うように振り返る男に私は話しかける。

「久しぶりですね。」

男の顔から血の気が引いていく、それを私は笑うように言葉が続ける。

「どうしたんですか？私に会って悪いことでも？」

「い、いや、無いよ。」

「そうですか、じゃあ少し話でもしませんか？」

「それは遠慮しておくよ…わかった、少しだけな。」

隠している刀を抜くふりをする男は仕方私の提案に承諾し店の席に座る、私はその前に座り問いかける。

「なぜ逃げたんですか？」

「そんなの鬼殺隊が嫌だからに決まってるだろ。」

「…そうですか。じゃあ追いかけてる理由に心当たりは？」

「無い、俺が聞きてえわ。なんで追いかけてくんのか。」

「それはついてきてくれたら教えてくれるんじゃないですかね？」

「じゃあいいや。」

「なんでそんなについてくるのを嫌がるんですか？もしかして何か隠しています？」

その問いに男は「ぐっ」と変な声を上げる。

これは凶星だな、私はわかりやすい反応に少し笑う。

「隠してるものはないぞ、絶対だ。」

「嘘ですよ、さつき変な声出しましたよね？」

「あれは・さつき食ったやつが戻りかけたんだ。」

「嘘はいいですから、本当のこと言ってください。」

「断る、少し話したしこれで勘弁な。」

そう言うと男は立ち上がって、店から出て行こうとする。

私はそれを止めるため肩を掴もうとするがひよいひよいと避けられる。

「待ってください。」

「嫌だね。」

前のように夜ではないので周りのことを気にしてなのか男は走らず急ぎ足で道を抜けていく。

それを私は駆け足で追いかけてながら男に声を掛ける。

「逃げないでください！」

「これは戦力的撤退だ、多分！」

曖昧な返答を口にして人が少なくなってきたところで高く跳躍する。

屋根上に上ると私を見下すかのように見ると、走り出した。

私はそれを追いかけて屋根上に上がって全力疾走をする。

その鬼ごっこ？は夜まで続く――。

男がバテ始めた頃には辺りは暗く、町明かりが目立つ。

「おい、それそろやめないか?」

「そっちがやめたらどうです」——花柱、上弦ト交戦中! 負傷シテイル!
! 直チニ急行セヨ、胡蝶シノブ!」ツ!」

私は鴉からの伝令に驚き、足を止める。

姉さんが死んでしまうかもしれない…。

私の頭が恐怖で埋まっていく。そんな私に男が声を掛けてきた。

「お前の姉さんだろ、行ってやれよ。」

「そうだけど…!」

「ぐずるな…仕方ねえな! ついて行ってやるから走れ! 鬼は嫌いだが!
!」

その一言はいらないと思うしながら私は鴉に案内を頼む。

「口が滑ったあ…、もう言ったからついて行くけど俺、戦力外じゃない
?」

お待ちください！・教祖様ああ！

「へえ、それでも立つっちゃうんだ。凄いね、カナエちゃん。」

私は血を口から垂らしながら目の前の鬼——童磨を睨みつけ、震える手を握りしめる。

息を軽く吸うだけで肺全体に痛みが走って立つのもままならない。

もう、無理かもしれない。そんな思いが私の脳裏を過ぎる。

そんな時だった。

「前、失礼しまああす！」

「…？」

聞き覚えが得る声と共に目の前に二つの影が躍り出る。

しのぶと、前に逃がした男だった。男は私を守るように立ち、しのぶは私の方に来る。

「しのぶ…。」

ふらりと前に倒れる。

「姉さん、大丈夫!？」

しのぶが取り乱しながら私を支える。

その時私はしのぶが刀を持っていないことに気づき問うと男を指さす。

男は童磨と何か話しながら刀を握っている。

その姿を見て私はお館様と話した内容を一気に思い出す。

いや、待つて超怖い。

弱い鬼でさえ俺無理なのになんで刀借りてこいつの前に立ってるんだよお!?

目の前には鋭い対の扇を器用に回して遊んでいる(?)教祖さんが。対して俺はあんまり握ったことのない重い刀を持って睨み合い。

これ俺の人生終わった、ほんとに。

さよなら人生。

と涙目になっていると教祖が首を傾げる。

「うーん、君は柱でもなかったら鬼殺隊士でもないんだね。でも体は

引き締まってる、なんでかなあ？」

ちよつとキモイ。なんで人の体型わかるのか聞きたい、この道何年目？

と俺が少し、いやかなり引いていると口角を上げて笑う。

「引かないでくれよ、俺は童磨。君の名前は？」

いつかの映画みたいだあ…。

とか考えながら一応名乗る。

「隼、姓はない。」

「隼か！いい名前だね！」

「そりやどーも。」

「それで聞きたいんだけど君はなんで彼女たちを助けるの？」

「…」

口が滑ったとか言えねえエエ！やべええ！俺かつこいいセリフなんて持ち合わせてねえ！

「黙秘、ねえ。それぐらい教えてくれてもいいと思うんだけど、まあいいか。…よし、先に君を救済してあげよう！」

「…頭おかしいんじゃないの？」

しまった、口が滑った。てへぺろ★じゃなくてこれは洒落にならない！これ教祖さん怒る、いやもう教祖さんおこだ！

「初対面の君にそう言われるとは思わなかったよ…でも君といると面白そうだ。」

怒ってないの!?

え、教祖さん???なんですか!?

もつと言いたいところだがこれ以上のことを言えば怒る気がするので黙っていると童磨が言葉を続ける。

「ねえ、俺の友達になる気はない？」

「気持ちは嬉しいんだけど鬼の友達はいいかな、うん。」

絶対ヤダ、そう言えば頸が宙に舞って終わる気がしなくもないのでちよつと言葉を選んで断る。

いいよ！っていうやつがいるなら俺は称賛する。

鬼の友達とかヤダ、それも上弦とか。言葉選び間違ったら首飛ぶや

ん。

「そうか、じゃあ無理やりでもいいやー！」

え、諦めてくれないのお!?

氷の蔓が俺に向かって巻き付くように飛んでくるのでやけくそで刀を両手で握って振るうと、氷の蔓が音を立てて地面に落ちる。その様子を見て教祖さんが顎に手を付け、呟く。

「うーん、もうちよつと強いやつでもいいか!致命傷になったら最悪鬼にすれば…。」

最後の方やばくなかった?空耳だといんだけど、というか前半のもうちよつと強いやつって何?今ので息上がってるんだけど、何その多量の氷柱。

お待ちくださいっ!教祖様ああ!

教祖さんの周りから出現した大量の氷柱が俺に降り注ぐ。

刀で斬り払うことも考えたが失敗して串刺しになるのは嫌なので足の速さとすばしっこさを生かして氷柱と氷柱の間に入って避ける。

恐怖、その言葉に限るな。とか言ってる場合じゃなくてエエ!

「ほらほらほら!避けてるだけじゃ俺に勝てないぜ!」

怖すぎや、今まで見てきた知性も理性もなさそうな鬼よか喋る分にはましかれども!技が危ないってエエ!

刀を振るう間もなく俺は避け続ける。

あれ、周りに氷柱があつて避けられない…?

咄嗟に刀で氷柱を斬るがもう周りに逃げれそうなところが無い、やばくない?

軽く跳躍して地面に刺さった氷柱の上を駆ける。

「あつは、すごいね!じゃあ、これはどうかな?」

雪女みたいな氷像がにゅって出て来て息を吹く、いや冷気と言った方がいいか。

着物にあたった瞬間凍てついて体温を下げる。バックステップで背中を見せないように冷気から逃げる。

「うーん、これも避けられるか…じゃあ…ん?」

童磨は空を見上げて嘆息を吐いた。

「もう陽光が差す時間とはね…。誰も救済できないと思わなかったよ…すごいね。」

お褒めに預かり光栄です、じゃ、帰ってください。

俺に感心する教祖さんに念を送っていると俺に一言、言っただけで静かに姿を消した。

『また会おう』、ねえ。」

会いたくもないし、会う気もないですね！

じゃあ二人の様子見たらまた逃げますか、鬼殺隊との関わりはこれで終わりにさせてくれ。

残る冷気に体を震わせながら、俺は陽光に当たって音を立てて消えていく氷を見守り、完全になくなったのを見て二人——胡蝶姉妹がいるところに足を運ぶ。

「大丈夫ですか!?!」

呼吸を荒くしながらそう言ってくる妹に俺は冷静に対応する。

「俺は大丈夫だが、姉の方がやばいんじゃないか?」

姉の方を指さして俺は言うど静かに頷く。

俺は姉に歩み寄り、傷に触れないように持ち上げる。

「俺が連れてくから、案内してくれ。本当は帰りたいけど。」

いや、言い訳させて? 胡蝶姉妹は俺の推しだったの。

だから何、前は逃げたじゃん? って話だけど死にかけの推しを目の前にして逃げれると思うか?

な? 逃げれないよな? はい、言い訳終わり。

冷静さを取り戻したようで静かに走り出す妹を俺は追いかけて始めた。

…俺、鬼殺隊本部に連れていかれない?

判断ミスったよね、絶対。

明日の俺は、鬼殺隊にでも入っているのかなあ?

後悔を胸に。

やっちゃまったなあああ、俺ええええ!!

あ、出て行っている？え？付いてきて？嫌アアア！

胡蝶姉を助けて二日経ちました。

さすがは柱と言ったところでしょうか、暴れています。と言うのは嘘で柱でもさすがに痛い怪我だったらしくベッドで横になってます。何で知ってるかって？そりゃあ…

俺が看病してるから、だよ。

羨ましい？…俺だって本当なら喜びたい。けどな、でもな俺は鬼殺隊本部に連れていかれそうだから逃げたいです。

俺は深く嘆息を吐いてベッドの傍に置かれている椅子に腰かけ話しかける。

「調子どうですか？」

「貴方のおかげでほとんど痛みはないわ、ありがとうね。」

「いえいえ、じゃあここから出てつても「駄目ですよ！」そつすか…」

俺の言葉を遮るように後ろから声が飛んだ、その声の主は胡蝶しのぶ、俺を絶対的に逃げさせない張本人。

「出て行くのは駄目です、まだ行くところが有るでしょう？」

行く、ではなく行かせるの間違いでは？とは思うが言うとは鳩尾にパンチが飛んできそうなので言わないでおき、別のことで話題を変えらる。

「…ところで、俺の羽織つてたやつは？」

「今頃ですか？まあ良いです、血と土で汚れたので洗いましたよ。」

屋敷が汚れる、とか思ってたそうだ。いや、汚れるけど。

礼を言っつて、俺はふと思う。

名前、名乗ってないな。

でも二人は上からの指令だからさすがに名前は知ってるか。

そう思っていると話しかけてくる。

「あ、そういえば私貴方の名前知らないんですよね。」

前言撤回、知らないそうだ。

上の人ら名前ぐらい教えてやれよ…。

「俺は隼だよ。ハヤブサって書いてハヤト。」

「ふうん…。」

聞いておいてその態度は何ぞ?!…別にいいが。

「しのぶ、知らなかったの…?」

「え…?」

「お館様言ってたけど…もしかして聞いてなかったの…?」

訂正、聞いてないだけだった。

上の人らごめんな。

「と、とにかく、私も名乗っておきます!」

逃げるようにそう言っただけで俺に向かって名乗った。

「私は胡蝶しのぶ、姉さんに近づいたら命の恩人であろうと斬ります。」

怖すぎやて、姉さんに近づいたらって…俺さ看病役やで、確実に斬られるやん。

というかなぜ俺を看病役にしたし…。

肩をバシツと叩かれ振り返る、

「私は胡蝶カナエ…隼君、これからよろしくね!」

「よろしくお願ひしま…あれ?」

これからよろしくね?それって未永くよろしくみたいな意味じゃ

…、知らんけど。

まさか…ね?そんなことないよね!

は、ははは…。

俺は乾いた笑い声を心の中で上げる。

頭大丈夫?とか聞かないでね、いつもは大丈夫だから。今は大丈夫じゃないかもだけど。

普通だと思っよ、俺の反応は。

だって、目の前にはお館様がいて、柱に囲まれているんだから。

なぜこうなったかは数刻前に話は遡る――。

「おー、空がきれい。」

早朝、俺は縁側で一人そう呟く。

何故早朝に一人で縁側にいるか説明してあげよう。

ただ普通に早く起きたからである。

それ以上の理由はない。

もう一度寝ようと努力はしたが眠気が襲ってこなかったので諦めて布団を出るとぼとぼと廊下を歩いていたら縁側についていた。

この間に逃げればいいのだろうが、その考えは脳内から消えていた。あまりにも空がきれいで見惚れてしまったからだ。

一人でただ空を見上げていた俺は驚かされ、「ひえ」という間抜けな声を上げる。

意外な反応だったのか驚かした本人は笑って俺の前に出てくる。

「ふふっ、ごめんね反応が面白くて…ふふふっ。」

ひでえ…。

お腹を抱えて笑うカナエさんに俺は顔を精一杯しかめて気持ちを表現していると俺の横に座ってまた謝ってくる。

「ごめんね、もうしないわ。」

そう言うカナエさんを横に俺は冷や汗をかいていた。

これ、しのぶさんに見られたら斬られるのでは…？

焦ってどうするか考えていると肩に手が乗せられる。

「そんなに焦らなくても大丈夫よ、しのぶはそんな子じゃないから…多分。」

「そうですよね…って最後なんか言いましたよね？」

「言っていないわよ。」

「多分って聴こえましたよ。」

「うっ」と声を出してバレたか：みたいな顔をしてすぐに花が咲くような笑顔を見せる。

「そうだ、私の怪我が完治したのは知ってるわよね？」

「知ってますけど、どうしたんですか？」

もしかして、出て行っていいとかですか？と静かに期待しているが空しくも打ち砕かれる。

「付いて来てもらおうわよ。」

やっぱりですかー。

では、せーの嫌アアア！…ふう。

どこに行くかはある程度分かっているが一応聞いておく。

「どこへ？」

「勿論、鬼殺隊の本部によ」

予想はしていた返答、行くのはまだいいんだけど何の話をされるかなんだよなあ。

あれかな？入隊しろとかかな？でもそんな話はないだろうな…。

俺には…わかんない★

考えるのを諦め俺がまた空を見ているとカナエさんが言葉を続けたので耳を傾ける。

「今からね。」

「—は!？」

少し遅れて驚き、カナエさんの方に向くと悪戯っ子のような笑顔が俺に見せた。

あ、この笑顔はやばいやつ——

その瞬間、頸に衝撃が走るとともに意識が飛んだ。

そんな事があって現在に至るわけだ。

目を覚ました瞬間の俺の顔はすごかったと思う、色んな意味で。

周りの視線が俺に刺さる中、お館様が口を開く。

「今日は来てくれてありがとうね、隼。」

その声に引き込まれそうになる自我を押しとどめて俺は平然（尚、心中では焦っている模様）とした顔で返す。

「大丈夫っす、お館様。」

少し生意気な感じだったかも、と言った後に後悔する。

見ないでもわかる、怒ってるやつやん。じゃなくてやばいやばいやばい！

特に風柱さんからの威圧がっ！

背中がなんかピリピリするとか思いながらお館様の言葉を待っていると後ろで正座していた風柱さんが先に口を開いた。

「お館様、この男は誰でしょうか？ご説明をいただいても…？」

「混乱させてしまったようですまないね。この隼は少し前に来た兄弟と関係があるんだ。」

「兄弟…？」

俺とお館様を除いた全員が首を傾げる。

俺は焦る、めっちゃ焦る。冷や汗が体中から噴き出る。

「もしや、時透兄弟のことでしょうか？」

「うん、そうだよ。彼は、時透兄弟の姿を消していた兄だよ。」

柱たちの視線が俺に集中するのがわかる。

俺は叫ぶ、大声で、心の中で。

なんでえええ、お館様知ってんのおおおお！

怖いんですけどおおお！

隼の弟

俺は目の前でニコニコと微笑むお館様に俺は絶句し固まる。そんな俺にお館様が言葉を続ける。

その言葉でさらに俺は動けなくなる。

「無一郎も有一郎も呼んでるよ、おいで。」

何で呼んでるんだあああ!?

お館様の後ろからひよつこと顔を出すと「兄さん!」って言って俺に抱き着いてくる。

それを俺は受け止めて頭を撫でてやりながら俺はお館様に疑問に思ったことを冷静に問う。

「何で俺のこと知ってるんですか? 弟たちには口止めしたはず…。」

二人を見ながら言うとな無一郎が目を逸らした。

「言った…?」

そう聞くと目を逸らしながらゆっくりと頷く。対照的に有一郎は無一郎が言ったと言わんばかりに俺を見る。

俺は嘆息を一つ漏らし、ポンと無一郎の頭を軽く打つ。

「ごめんなさい…。」

そう小さくなつて謝る無一郎に俺は微笑み、大丈夫と声を掛けてまたお館様に問う。

「…聞きますけど俺をここに連れてきた理由は何ですか?」

「二人が会いたがってのも一つだけど、私が隼に興味があったからかな。」

俺に興味ってなんじゃそれ。

首を傾げているとお館様が俺に問う。

「二人を鬼から守ったのは、隼だよね?」

俺はまた弟たちの方を見る。今度は有一郎も目を逸らした。

言いたい気持ちはわからなくもないがうちの弟たち口が軽すぎるし、軽い嘘をつく。

俺は二人に呆れながら答える。

「…俺は助けた憶えないですけど?」

「…?」

首を傾げ眉を顰めるお館様に俺は言う。

「俺逃げただけですもん、俺が人を助けるなんてできるわけじゃないですよ。」

お館様も弟たちも含めた全員が間拔けな声を漏らす。

「え?俺が助けたとでも思っていました?鬼から逃げた、ただの臆病者ですけど?」

これは嘘じゃない、本当のことだ。

俺の前世の記憶が戻ったのは鬼が家に入ってきたとき。

あの時の俺は焦って二人に布団を被せて鬼に馬鹿正直に突撃した。

まあ完敗だった、体中鬼の爪痕だらけ。傷がじんじん痛んで立つのもやっと、対して鬼は無傷で元気いっぱい。

俺の身体は恐怖に染まって『逃げる』という行動を起こした。

鬼は俺を追いかけてきた。

弟たちのことは気になったが俺はそれを脳の隅に押し込んで鬼から逃げた。

それから俺は『逃げ』に執着した。

簡単に過去を言うところな感じだ。

まあ、滑稽で馬鹿な話だとは思う。

全員が口を開けてポカンとしているだろう。実際見える範囲で無一郎、有一郎、お館様、あまね様計四人がそうなっている。

「二人は勘違いしたんですよ、俺が『守った』って。俺は鬼から逃げただけです。結果的に助けたとなったかもしれないけど俺は助けたつもりはないので感謝される筋合いはないんです。」

俺は情けない兄でごめんな、という意味を込めて二人の頭を撫でているとお館様が優しい声色で俺に言う。

「隼がそう思ったとしても二人は助けてくれた、そう思っているん

だ。」

「まあ、そうですね。」

「その感謝を否定してはだめだよ。」

正論である。俺は何度か頷き話はこれだけかと問うとお館様は首を横に振った。

「最後に提案をさせてもらうね、鬼殺隊に入隊しないかい？」

その提案に弟たちは乗る。俺は断ろうと口を開き、閉じた。

弟たちが俺をつぶらな瞳で見、お願い兄さんも乗って？みたいな感じで見てきたから。

俺は迷いに迷った末、こう答える。

「申し訳ありませんが、俺は断らせていただきます。」

「えっ…。」

無一郎が声を出して驚く小さくごめんなど返してお館様を見る。

「そうか、でも呼吸の習得だけはしてもらおうかな。君は実弥と同等のかそれ以上の稀血かもしれないからね、いざとなれば自身で鬼と戦ってもらわないと。」

「は、はあ…。ですが俺は足という武器が…。」

「ね？。」

謎の威圧感に負け俺は渋々頷く。

良いように言いくるめられた気がするんだが…。

てか、これ柱が必要な話だったの？

そう疑問をぶつけるとお館様は答えた。

「この九人から師範を選んでもらおうかと思っただけ。」

「はい…。」

この九人から選ぶ？ちよつとよくわからないですね。

普通、育手のところに行くのでは…？というか柱忙しいんじゃないの？

「それなら私が引き受けますよ、皆さん忙しいでしょうし、私はもう引退です。」

「そうだね、適性があるかはわからないけどカナエのところならちよつといいだろう。」

俺の意見なんて聞かずどんどん話が進んで行く。

選ぶって何だろうね、と思っっていると無一郎たちも行くところが決まったようで話が終わった。

無一郎たちは柱の元ではなく育手の元に行くようだ。

「じゃあ、カナエと隼と無一郎と有一郎はこれで帰っていいよ。」

「じゃあ行きましようか、隼君。」

「あっはい。」

カナエさんは俺の為に来たようだ、優しいなあ。そう思いながら涙目になった弟たちと別れ、蝶屋敷へと帰った。

帰れば、何故か蝶屋敷の前で鬼の形相でしのぶさんが刀を地面に刺して仁王立ちしてました。

理由はわからないけど斬りかかられました。

頬に掠って死ぬかと思った。カナエさんが止めてくれなかったら腕一本飛んでた気がする。

俺、呼吸習得以前にしのぶさんに殺されるんじゃない？

隼の引く血

隼が元花柱に弟子入り（？）をして三日目。

「ひいっ！」

そんな声が蝶屋敷の一角に響く。

声の主は時透隼、いや隼としておこう。

彼が今、行っているのは木刀での打ち合い、非常に残念ながら相手は現役のア隊士の胡蝶しのぶ。

どちらが優勢か、そう言われると誰もがしのぶを選ぶだろう。が、優勢なのは隼でしのぶは体力が底をつきかけているのだ。

「ハアーツ、早く倒されてくださいっ！」

「嫌ですううう！絶対串刺しにするだろ!!」

「ぐっ、そんなことはないです！」

「はああい！今詰まった、詰まったよね!? やっぱり串刺しにするつもりだったんだね!」

そんな事を喚きながらしのぶの木刀を捌く隼は異常と言つてもいいだろう。

それを傍で見守る二人——胡蝶カナエと栗花落カナヲがいた。

異常な光景をニコニコと微笑みながら見守るカナエ、眉一つ動かさずじつと見つめるカナヲ。

「こちらも異常な光景だろう。」

「ちよ、ほんともう……ふううう……」

しのぶは痺れを切らして鋭く呼吸をする。

「お、おま、ちよつと待て！それはだめ！俺の身体が痣だらけに……うわああああああ！」

——蝶ノ舞 戯れ

相手を惑わせる不規則な足運びで近づきすれ違いざまに突きを入れる。

決まった、そう思ったしのぶだったが後ろから響いた悲鳴に大きくため息をついた。

「あ、あつつつぶねえええ！数ミリ、数ミリずれてたら俺の眼球潰れて

「たあああ！」

目元に走った刀の掠り傷を大袈裟に叫び、床を転がりまくる。

「時透さん、それだけの傷で済んだだけいいじゃないですか！」

「え？もしかして他の隊士は痣だらけで帰っていくの!?まじかー、まじかー、うわー。って

言うか俺は隼だ！時透なんて名前は捨てたからな！」

「貴方が私に勝てたら呼び方変えてあげますよーだ。毎回負けてる貴方には無理でしょうね！」

「こいつうー！」

しのぶはそう言っているが毎回負けかけているのだ。今回も危なかったから呼吸法を使った、まあ大半捌かれたが。

「隼君、貴方は強いからもっと自信もっていいわよ！」

「あーはい、そういうお世辞ですネ、そう言うの良いです…ぐふう！」

しのぶが放った鉄拳にて隼は床に倒れ静かに腹を抑えて呻き声を漏らす。

「そう言うのは素直に受け取ればいいんです！」

「わ、ワカリマシタ…今の鳩尾よくないわあ、般若そのものだわあ…」

「はい？何か言いましたか？」

「い、いえ？何も言っていないですが!!」

「…なら、良いですが」

冷や汗をかきつつも隼は木刀をカナエに渡し道場を後にした。

死ぬかと思ったあ…。

目元の傷に触れながら、真昼間の街を歩く。

別に蝶屋敷から脱走した訳ではなく用があつて町に来ているのだ。

つい先刻、カナエに様々な薬を調達してくるように頼まれたのだ。横にはしのぶが。

両者が口には出さず思っていることを代弁しよう。

——なんで一緒なんだ!?

——なんでこの人と一緒なんでしようか!?

二人はグツと拳を握っている。火に油を注ぐ様なことをする人が

いればその人の命はないだろう。

「時透さん、寄り道とか無しですからね」

「わかってるよ、で何買うんだ？」

「はあ？聞いてなかったんですけど!？」

「俺なんてどうせ男避けだろ！」

「はい？」

首を傾げるしのぶに隼は何の恥ずかしげもなく言った。

——そこらの女より顔整ってるんだから自重しろ。

その言葉に顔を紅くして立ち止まるしのぶに今度は隼が首を傾げる。

——本当のことだろ？

そう付け足した瞬間、しのぶの拳が隼の腹を捉えた。

人が多い通りなので叫ぶわけにもいかず、静かに抗議する。

「ほ、本当のこと言ってるのが悪いんだよ……」

「ちよつと、口閉じててください……」

「ひでえ……俺が何したって言うんだ……」

その後、ちゃんと薬を買って帰った。めでたしめでたし。

「今日は、私と打ち合いしてもらいます」

——は？

目の前でニコニコ笑顔でカナエにそう言われ隼は困惑する。

「今日は私の呼吸法を見てもらうこともかねて、ね」

「いや、呼吸法はちよつと……」

「大丈夫よ、隼君なら！」

なんだその絶対的な自信は!?

これを断ればしのぶに滅多刺しにされる未来が見えたのか隼は了承した。

ある程度距離をとり、木刀を構える。

「じゃあ、私から」

その声と共にカナエが床を踏み込む。

——肆ノ型 紅花衣

常中ができないとはいえかなりのスピードの斬撃。

それを涙目になりながら隼は斬撃に合わせて弾いて、弾いて。

「さすがは、始まりの剣士の血を引いてるだけ、ある…わねっ！」

「へ?…あああ！」

その時、隼は思い出した。

時透家の、先祖を。

——そうだったわあ…、俺の先祖あの人だったわあ…。

「大丈夫?隼君」

「あー、多分、大丈夫です」

——伍ノ型 徒の芍薬

瞬きのうちに斬りこまれる九連撃。

隼は思考が導くままに木刀を振るい、見事に九連撃全てを防いだ。

カナエも驚く、がそれ以上の驚いているのはもちろんこいつ、隼だ。

うっそだろお前!?

こんなうまくいくか普通!?!あ、わかった。これはカナエさんが手加

減してくれたんだな!うん!

見事に勘違いを起こした模様。

「手が、止まってるわよッ！」

「あ——」

パスツ

カナエの木刀が隼の頸に吸い込まれるように向かって——良い音と共に隼は倒れた。

「姉さん!って、遅かった…」

「あ、しのぶ。私やっちゃった感じかしら」

「ええ、やっちゃったわね、姉さん」

「ごめんね、隼君。楽しくなっちゃって！」
サイコパスだあ…、そんな声が隼から聞こえたそうなの。

これが俺の呼吸だああ！つて、ええ？最終選別：!?

蝶屋敷の道場で行われるのは怪我をした隊士が復帰するために行う機能回復訓練。

多種多様な呼吸を使う剣士が来るため、花の呼吸の適性が全く無く、別の呼吸法の習得を目指している隼にとっては最高の場所だった。

本人はもういい、お腹いっぱい！と言っているそうだが、まあそこは胡蝶姉妹の威圧で無理やり、だ。

「隼君！こっち来て相手してもらってもいいかな？」

「ちよつと待っててくださいね！」

隊士が使う呼吸を学ぶため隼はあと少しで機能回復訓練が終了する、という人の打ち合いの相手をしているのだ。

カナエと普通に打ち合えるようになった隼は隊士たちのいい稽古相手になつて評判がとてもいい。

どこぞの般若顔の妹さんとは違い——おつと、これ以上はやめておこう。

「そうだ、隼君は呼吸法は習得できたのかい？」

「ええ、できましたよ。やつとここから抜け出せそうです」

「やつぱり入る気はないんだね！あははっ！」

隼と笑顔で話す青年の名は望月もちづき陽一郎よういちろう、隼とかなり仲が良い隊士であり、良い稽古相手でもある。二人は少し談笑してから木刀を握つて構えた。

「隼君の呼吸法、俺に見せてくれよ」

「もちろんいいですよ、でも手加減はできないので！」

ここだけの話、今日まで陽一郎に完膚なきまでに倒されていたのだ、隼はそれを少し根に持っているから手加減をする気が無いのだ。

「ははっ！言うね、じゃあお兄さんも頑張っちゃおうかな！」

陽一郎の言葉を最後に、二人は一言も発さず少しの沈黙の後同じタイミングに踏み込んだ

コンマ一秒のズレもなく、同時に。

——壺ノ型 不知火

床にひびが入るほどの踏み込みで距離を詰めて頸に向かつて横薙ぎを繰り返す。

——月の呼吸 壺ノ型 闇月・宵の宮

頸に吸い込まれるような横薙ぎを横薙ぎ——それも異次元の速さ——で防ぐ。

それは陽一郎の木刀を真ん中から叩き割った。

「うお、速すぎ……！」

——だってあの人が使ってる呼吸だしあの人の子孫だし、まあ多少は……ね？

そんなことは言えず、ニコニコとまた談笑を始めると後ろから声が飛んだ。

「時透さん！お喋りもほどほどにしてくださいね！」

「あの人……しのぶさん、地獄耳なの？」

「いや、それだけ俺たちのことを意識してると思えば……ぐへあ」

「隼君!？」

後ろから飛んできた木刀が後頭部に直撃して床に倒れこんだ。

「誰が貴方のことなんか意識しますか、調子に乗らないでくださいね！」

「ハイ、ハイ、すみませんでした」

即座に土下座をして何度も謝る姿は、あまりにも滑稽で周りの隊士たちはくすくすと笑っている。

「望月さんもですよ！退院、先延ばしにしますよ！」

「あ、それはだめです！すみませんでした」

「ほらすぐ脅すー、やーい脅し魔ー！そんなんだから——」

「なんですか？っふ！」

「アツツ」

パアアアン

そんな音が蝶屋敷全体に響いたという。

「隼君、呼吸完成したのね！」

「エ、まあ、はい…」

——創つたの俺じゃない：俺の先祖が創つたの：

言えない苦しさから頭を抱えながら愛想笑いで話を続けていると、カナエが稽古でもする？と提案した。

「えーあー、そうですね、しましうか！」

白目だったという。

木刀を試しに何度から振って二人は構えをとる。

「じゃあ、今回も私から」

——陸ノ型 渦桃

身体を捻りながら突撃してくるカナエさんに突進する。ように見せかけて後ろに回って振りかぶる。

——玖ノ型 降り月・連面

幾重にも重なった斬撃の層がカナエに降り注ぐ。が、それを自身を守るように放つ弍ノ型で相殺してみせる。

「ッ流石！」

流石は元柱、冷静を保って慌てずに対応する。

——肆ノ型 紅花衣

——壺ノ型 闇月・宵の宮

一ヶ月間程度、隊士たちの相手をしたおかげか判断する速度が速くなり、焦ることもなくなった。

打ち合いが数分間続き、決め手となった技は——

——伍ノ型 月魄げっぱくさいか災渦

だった。

振りかぶる動作が無く放たれた幾重の横薙ぎにカナエと木刀が耐えられなくなり、隼人の勝利で事は終わった。

やっと蝶屋敷から、鬼殺隊から逃げると思っていた隼の気持ちはカナエの言葉によって潰される。

「呼吸を習得したからって、まだ出ていいわけじゃないわよ？」

「エッ、いやでも…」

「完璧になってから、ね？」

「アツ、ハイ」

そんな事があってから数ヶ月、隼は道場で絶叫していた。

何故なら——

「何で最終選別行かないといけないのおおお！」

まあ、そういう事だ。

最終選別っ！——こんにちは手鬼さん！

「いいいやああ！最終選別なんて行かねええ！」

そう言つて屋敷の柱にしがみつくと隼にカナエは呆れつつ、最終兵器を口からこぼした。

「無一郎君達も参加するらしいけど……」

「へ、へえ、そうなんですか」

「無一郎君達が死んでしまつていいの？」

「ぐっ……そんなこと言つて俺が行くと思ひますかあああ!?!」

「思つてるわ」

「ええ、そうですよ！俺は弟バカですからね行きますよ、行きやいいんでしようが！」

「そう！よかつたわ！じゃあ、支度して、ほら」

「え、え、え？うわああ！」

——はめられたアアア

後悔時すでに遅し、隼は刀を持たされ、蝶屋敷の玄関に立っていた。

「いや、あの、ほんとに……」

「はい、じゃあ頑張つて！藤襲山までの道はしのぶの鴉が案内してくれるから！」

「頑張つてくださいね、応援してます」

「あ、まじ？じゃあ俺頑張っちゃおうか——あぐっあ」

「調子には乗らないでください、早く行つてください」

「さーせんしたああ！」

脳天に鉄拳を喰らい、全力で頭を下げて逃げるように少し偉そうなしのぶの鴉を追いかけ、目的地に向かって走り出した。

何とも気が抜ける、出発だったが。

「……すげえ綺麗だな」

咲き誇る藤の花に触れながらも歩を進めて広場まで行く。

広場に出るとほかの参加者と見覚えのある二人が隼を見つけたよ

うで手を振っている。

「久しぶり、二人とも」

手を振り返しながら二人の前まで移動してにっこりと笑う。

「久しぶり兄さん！」

「久しぶり」

抱き着く無一郎と素気ない挨拶を口にして澄ました顔をする有一郎、対照的な兄弟である。

「確か二人は霞の呼吸だったか」

「うん、そうだよ！」

にかつと笑う無一郎、何故知っているのかわからず目を見開く有一郎。

「兄さんは月の呼吸だよね！すごいね、自分で創り出せるなんて！」

「ま、まあな！」

——俺が創ったわけじゃないし、無一郎とかは自分で型つくつとつたやろ…

嘘を口から吐き出しつつも話していると、凜とした声が響く。

少女ら二人が選別の内容を淡々と説明していく。

最終選別の内容としては現役の鬼殺隊士が捕まえた飢餓状態の鬼が蔓延る山中を、七日間生き残るというもの。一見、難しすぎるとは思うだろう、だが一度は隊士に斬られて死にかけて弱っている鬼を殺せない者など隊士になった瞬間死ぬのは目に見えている。生き残ったからといって死なないとは言い切れないが。

「武運を」

その言葉で終わり、参加者たちは続々と門を潜って鬼が蔓延る山中に足を踏み入れていく。

それを追って隼たちも入山していく。

「…無一郎、有一郎、俺とは別行動で頼む」

「ええ」

さつきまで澄まして顔をしていた有一郎もさすがにこれは驚きで声を漏らす。

「いや、俺やっぱり月の呼吸試したいからさ。二人は強いから大丈夫

さ」

「うう、わかった」

「ちゃんと帰ってきてね、兄さん」

勿論、そう答えて隼たちは分かれた。

——狐の仮面見つけたから咄嗟にそう言っちゃったけど、女の子だったし真菰、なのかなあ……

「まてええあああ！」

「こいつは俺の獲物だああ！」

拜啓、無一郎、有一郎。

俺は生き残りそうにないです。

後ろから鬼が来てます、怖いです。

前までは結構な頻度で見てたんだけど数ヶ月まともに見てなかったもんだから……

「うう待つわけねえだろうがあああ！」

正直言つて、童磨より怖いです。

あいつまだまともに喋るじゃん、こいつら——

「ぎゅぐあああ！」

「マテアアア！」

意味わからんこと叫んでるもん——！

すばしっこさと数ヶ月でバカみたいについた体力を使い、隼は鬼からどンドン距離を離して——

逃げ切った。

木に駆け上がって、呼吸を整えて辺りを見下ろした。

「ん——！・星空が綺麗、じゃなくて手鬼探さないと、いや年号鬼……？」
首を傾げていると、山の一部がずしんと動いた。

「あれかな、……行くかあ、嫌だな、ほんとに」

無一郎と有一郎が来てませんように、そう願いながら木を足場にしてお移動を始めた。

「お前で、十三人目だア…」

「お前は…殺して…」お取込み中のところ失礼しまーす!」え…?」

地面を踏み込もうとした仮面をかぶった少女——真菰は横から大声を上げながら入ってきた隼に驚いて足を滑らせた。

それを読んでいたかのように受け止めて立たせると、隼は刀を抜いた。

「こんにちは、手鬼さん!」

「誰だア?お前はあ?」

「隼と申します!失礼ながら、貴方様に死んでいただきたく!」

「——は?」

爽やかな笑顔でそう言われ、真菰も手鬼も口をあぐりと開けている。

失礼にもほどがあるだろう、そう思ってしまった手鬼と真菰。

「死ぬのはア、お前だア!」

「お?お?殺せるならやってみろよ?ほら、こいよ」

「貴様ああああ!」

「えーと、その君!後ろ下がってね」

真菰にそう言ってから隼は構えをとって最後にまた煽った。

「ねえ、ねえ、手鬼さん知ってる?今の年号はね…大正なんだよお!知ってたああ!」

「ああああああ!」

「プークスクス、怒ってやーんのー!」

真菰はキュンと来たようだが煽っている姿を見て即座にその感情を捨てた。

さよなら手鬼、さよなら鬼殺隊！つて、お館様このや
ろおおお！

鬼ってやつぱり、キレ症…？

前方から伸びてくる無数の手を斬りつつ、首を傾げる。

というか俺何で煽ったんだ…多重人格…？俺も結構ヤバ…ひい！

あぶな！

地中から音を立てて出てきた手を空中に逃げて避ける。

「貴様あ！なぜ当たらんのだア！」

「知るかバーカ！その無駄にでかい頭で考えろ、バーカ！」

「ぬあ!？」

変な声を出して目を見開くと、さらに手を飛ばしてくる。

この手の数なら…。

——参ノ型 厭忌月・銷り

三日月を描く二つの斬撃が鬼の手を斬り刻む。

俺、結構戦闘狂になつてきちやった？嫌なんだけど。

「よそ見するなああ！」

「その見た目だったら余所見ぐらいするが!？」

過去が辛いのは知ってるけども、なぜそうなつたんだ!？」

「ところで——「ねえ！」んあ?？」

後ろから声があったので誰かと思つて振り返ると真菰さんだった。

そりやそうか、そう思いながら何か？と問うと、

「私にその鬼を殺させてほしい」

とのことだった。

俺は二つ返事で承諾して真菰さんの横に降り立つ。

「俺の名前は隼、君は？」

知ってるけど、名前言つたら引かれるじゃん。念のため聞くつての

は大事さ。

「私は…鱗滝真菰」

鱗滝真菰？名字は鱗滝だったのか。

新しい情報に驚きつつも、俺はぎっくりとした作戦を伝える。

「俺が援護する。だから君は頸を斬ることだけ考えて」

「え、でも」

「はいはい、俺を信じて突っ込めばいいから。行つてらっしゃい！」

背中をバシツと押すと走り出してくれたのでワントempo遅らせて俺も走り出す。

俺の方に伸びてくる手は少なく、大半が真菰さんの方に伸びている。

心配だったが鬼神の如く手を斬っているのを俺は確認したので地面から真菰に伸びる手を排除しながら一つアドバイスをする。

「手鬼の煽りには乗るなよ！あいつかまちよなだけだから！」

「わ、わかった！」

「なっ!? 貴様だけはああ！」

真菰へのアドバイス(手鬼に対しては煽り)はかなり効いたようだ。

俺の方かなりの数の手が飛んできて、呼吸の使い時！

——陸ノ型 常夜弧月・無間

縦横無尽に剣戟を飛ばす、かなり範囲が広いので本体にも傷が入っている。

俺を意識して手を飛ばし過ぎたのか真菰が手鬼の顔前に迫っていた。

「(大丈夫だ、俺の頸は斬れない、あいつでも斬れなかったんだ)」

とか思ってるんでしようねえ、手鬼さんは。

俺は口角を上げてにやりと笑う。

錆兎さんが頸を斬れなかったのは、刀を酷使しすぎたからなんだよ。

真菰さんは多分、錆兎さんが死んでから血反吐を吐くような努力をしている、だから——

——壺ノ型 水面斬り

真菰が放った横薙ぎは手鬼の頸に吸い込まれて、断ち切った。

「何故、俺の頸が斬られてるんだ!? あいつでも斬れなかったのに！」

俺は真菰さんがいるところに走って横に立つ。

手鬼は何か叫んでる、多分頸のことに關してだろう。

「手鬼さん、あんたは人を舐めすぎたんだよ」

俺がそう言つてやると、手鬼は更に喚いた。

「次は、こんなことにはなるなよ」

灰と化していく手に少し触れて、俺は真菰さんの方に振り返つた。

「君からは優しい匂いがするね」

「匂い？」

「うん、私は嗅覚が良くてね、君の感情も読めちゃうんだ」

「へえ…」

嗅覚が良かったのか、そんなこと言つてたような言つてなかつたよ
うな…。

一人で首を傾げていると真菰さんが頭を下げてきた。

「ありがとう、私にあの鬼を譲つてくれて」

鬼を譲るって…まあ良いか。

「頭上げてよ。実は俺、鬼が苦手だね。あの時鬼を殺させてほしいつ
て言つてくれた時に内心感謝してたから」

「え、そうだったの？結構煽つてるから、鬼は苦手じゃないと…」

「十三歳くらいから追いかけられると苦手になるもんさ」

「え、十三歳って…」

「鬼が集まつてきそうだし移動しようか」

無理やり話題を変える、俺の特技。知らんけど。

一番早く陽光が差す方に向かいたい気持ちはあるがそれを狙つた
鬼がたむろしていると予想して反対方向に向かつて走る。

その意図をくみ取つてくれたのか静かについてきてくれる。

というか、いつまで一緒にいるの？

そんな疑問を持つこと七日目、俺は今最初の広場に居ます。
手鬼を討伐してからは面白いことなど起きず、しいていうなら無一郎たちと合流して

「兄さん、彼女？」

って真菰を見た瞬間口をそろえて言われたくらい。

その後はもちろん二人で違うと説得した。納得してくれたかはわからないんだけど多分大丈夫。多分。

まあそんなことはどうでもよくて。

今の俺は鬼殺隊からやつと逃げ出せる、その思いしかなかった。

今日で鬼殺隊ともおさらば！明日から何しましよかねえ…

なんて考えていると最終選別の説明をしてくれた子たちが門辺りに出て来て人数を確認し始めた。

「えっと、全員、合・格？」

困惑してらっしゃる。

無一郎と有一郎が片っ端から鬼を殲滅してかかったらしい。怖い双子だわあ。

「あの、すみません俺達…」

右側にいた七人が辞退します、と言って山を下山していった。

「あ、私達は…」

左にいた二人の女性たちは隠になると言って別の場所へ案内されていった。

残ったのは俺達四人、実質俺は入らないから三人。

「まずは、鴉をつけさせていただきます」

少女が手をタンタンとリズムよく二回叩くと空から三羽の鴉が降りてくる。

俺の分はいない、やっぱり話は通ってたんだな、そう思っていると何やら肩に重さを感じた。

ゆっくりと顔を向けてそれを見る。

「おっ」

肩に乗っていたのは鴉ではなく、隼。

なんとなく頭を撫でて、ほんわかして…じゃなくてなんで!?

「あのー、俺は隼って言うんですがお館様から何か聞いてませんか？」

「…隊服を渡すことと玉鋼を選んでもらうようにと言われましたが」

「…あの人はああああ！」

俺は地面に膝をついて拳で地面をたたく。

「は、隼？」

「兄さんどうしたの…」

「入りたくなかったとか、じゃない？」

「有一郎、正解！じゃなくてほんとやだあああ！」

嘆くこと数分、俺はやむなく玉鋼を選び、隊服をもらう。

「俺、蝶屋敷帰った瞬間これ全部押し付けて逃げるから」

そう言っていると有一郎が希望のないことを言ってきた。

「あの胡蝶さんでしょ？兄さんじゃ無理だよ」

「有一郎、希望は捨てたらだめなんだよ」

「はあ、そうか。じゃあ頑張つてね」

有一郎は諦めてくれたが問題なのは無一郎。

「兄さんも来てくれたから入ってくれと思うってたのに！」

「それはお前らが心配だったからで！」

「別々に行動したのにな」

有一郎、それは触れちゃいかんだ！

「たまには会いに行くからーな！」

「…うう、わかったよう。会いに来てね？」

「もちろん」

丸く収まった、よし、帰るか。

山を四人で下山していると真菰が俺に話しかけてきた。

「あのさ、あの時隼が介入してくれてなかったら私死んでたんだと思うの」

「うん」

「そのお礼とか手鬼のこととか私と師範からお礼がしたいの」

うーん、これはよろしくない方向に行ってる気が…。

「だから、家までついて来てくれる？」

断ろうと口を開けるが弟たちからの視線に俺は渋々頷く。

「いいよ」

「本当!?じゃあ、行くー!」

そう言つてニコツと笑うと俺の手を掴んで真菰は走り出した。

「兄さん、お幸せに〜」

無一郎たちは声を合わせ、無邪気な笑顔でそう言つてきた。

お前らああああ!!そういう関係じゃないって言ったやろ
があああ!

娘さんを俺にください！つてちやうわああ！

「判断が遅いッ！」

パシンッ

そんな音が響いた。後、絶叫が響く。

「あんたが判断速すぎるんだよおおお!!」

「隼…体力、無尽蔵過ぎない…?」

「へ?」

いつの間にか立場が逆転して俺が真菰を引っ張る形になっていた。真菰はかなり息切れしているようだったので取り敢えず俺は止まる。

「大丈夫か?」

「…大丈夫か、って隼の方こそ大丈夫なの?」

「俺は見ての通り元気だが…あ、もしかして遠回りに馬鹿にした?」

「してないよ…」

「じゃあいいんだけど…あ!もしかして真菰は常中やってない感じか」

常中、その言葉に首を傾げて何かと聞いてきたので答える。

「常中つてのはな、全集中の呼吸を四六時中やり続けるやつだ」

「全集中の呼吸を、四六時中…:はあ!」

面白い反応だな、そう思いながら俺は苦い思い出を話してやる。

「俺を指導してくれた人鬼でさ、全集中の呼吸習得した瞬間に常中やれって言うてきてさ…いやあそれは地獄だったよ…」

「それ聞いたらやりたくなくなってきた…」

「ちゃんと体づくりしてたらそれほどしんどくはない、はず」

カナエさんが言ってた、と付け足して俺が歩き出そうとすると真菰がカナエさん?と聞いてきたので足を止める。

「カナエさんはな、元柱の人で超絶感覚派の人」

「柱、へえ…。それで超絶感覚派って言うのは…?」

「全集中の呼吸教えてもらおうとき、擬音語使ってきたんだよ。全く分からなかったからカナエさんの妹に頼み込んで教えてもらった」

「へ、へえ…（柱は個性的な人が多いんだ）」

そんな事がありつつも俺と真菰は鱗滝さんの家の前についていた。

「鴉で連絡はしたから大丈夫だとは思っただけど…」

早速鴉を使いこなしてらっしやる、というか何が大丈夫なの？

そう疑問を浮かべながらも真菰の後をついて玄関を潜る。

「ただいま—」

「どうも、初めまし…てえ!？」

小刀が奥から俺に向かって飛んできて反射的に横に一步移動する。

小刀は玄関のドアに乾いた音を立てて深く刺さる。

「今のを避けるか…だが儂は認めんぞ…」

ん!?何を勘違いしてるんでしょるか鱗滝さん!?

真菰がいるにもかかわらず俺の方に歩いてくると前で止まって、

「お前は真菰が床に伏せたらどうする」

ふあ?この人何言っちゃってんの？

俺が首を傾げると横から掌が飛んでくる。避けようとするが遅かった。

「判断が遅いッ!」

パシンッ

頬を叩かれそんな音が家に響く。俺は叩かれた理由をなんとなく察して、

「あんたが判断速すぎるんだよおお!?」

そう返した。更に、

「娘さんを俺にください! ってちやうわああ!俺は別にそんな事の為に来てないわあ!」

「…!？」

それから真菰がちゃんと説明してくれた。

何やら鴉が報告ミスをしていたらしい、大丈夫かな？

「すまなかつた、隼殿」

「俺も娘がいたなら鱗滝さんみたいになりますよ、だから気にしないでください」

結婚願望無いので知らないですけど、と口には出さずいると真菰が本題に入った。

「鱗滝さん、鏑兎達：兄弟子たちのことで話があるの」

「ほう…」

「今まで帰ってくる弟子の人数少なかったよね、それは最終選別である鬼がいたからなの」

「鬼…」

「その鬼は、鱗滝さんがまだ現役で柱をしていた時に捕獲した鬼だった」

「何だと…!？」

「鱗滝さんが渡してくれた『厄除の面』を目印にして最終選別に来る弟子たちを喰らってたの」

「…」

静かに服を握りしめて鱗滝さんは涙をグツと堪えていた。

「私はその鬼に言われて怒りに任せて斬りかかろうとした、そこに隼が入ってきて——」

煽って助けてくれた、そう小さく言った。

鱗滝さんが天狗の面を通してでもわかるくらい驚いています。

待って、俺がやばいやつみたいになるからあ！俺普通だからあ！

「多分、あのまま斬りかかってたら死んでたと思う」

「…そうか。鬼は、どうなった…?」

「私が斬った、隼に助けてもらって」

「そう、だったか…。真菰、良く生きて戻った、隼殿感謝する…!」

俺は煽ってただけですけどね、雰囲気ブチ壊しなことを言えるわけもなく抱き合う親子を俺はほのかに笑みを浮かべて見守っていた。

「じゃあ、またね」

鱗滝さんの家の玄関でそう言って俺は外に出る。

辺りは暗くなっている、蝶屋敷に着くころには深夜かな、そう思っ
て足を進めていると後ろから声が届く。

「隼!」

後ろを見るといたのは真菰だった。横には鱗滝さんがいる。

「もう暗いし鬼も出るから泊っていきなよ!」

「遠慮するよ、俺は足という武器があるから」

「そっか…」

少し表情が暗くなる、がすぐに笑顔になる。

「じゃあ、また会おうね〜!」

「…ああ、会えたらな」

大きく手を振る真菰に手を振り返して俺は蝶屋敷への道を歩き始
めた。

「ただいま戻りま——ぐはあ」

蝶屋敷の玄関に手をかけて開けた瞬間、何かが腹にヒットした。

「貴方、今まで何してたんですか!」

「し、しのぶ…いやちよつと知り合った子の見送りを…」

あながち間違いないのでオツケーです、とか思っているとおで
こを指先でつつかれる。

「鎧鴉で連絡入れたらどうなんですか!？」

「いや、俺のは隼」

「そんなのは良いですから!心配したんですよ!？」

「あつ、すみせん」

「姉さん起こしてお説教ですっ!」

隊服とか全部押し付けて逃げようかと思つてただけど、今日は無理そう。

その後、胡蝶姉妹による三時間にも及ぶ説教が続いた。

やってらんねえよなあ!

やったあ今日から自由の身!

「カナエさん、お世話になりました!」

「えっと、それはどういうことかしら…?」

「ここから出て行くってことです。これは要らないので!」

最終選別から帰り二人から説教を受け、布団で寝て、起きた俺はカナエさんに隊服と借りていた日輪刀を押し付けて蝶屋敷を出ようとしていた。

「お館様が来るように呼んでたんだけど…」

「行くつもりは毛頭無いので」

「それでも刀が届くまでは待つてもらわないと」

「血とか見たくないのいいです、刀より自分の足の方が自信あるので」

何とか俺を止めようとするカナエさんを避け、俺は玄関から飛び出す。自分勝手に申し訳ないとは思いますが、勝手に剣術叩き込まれたけだしね。

「隼さん!」

「ん?…しのぶさんか」

「何で出て行くんですか!?!」

「俺ここに居座るとも言ってるし、そんなこと言われても」

「そ、それはそうですけど」

あらヤダ照れてる、そんなに居座ってほしいならいいぞ。…とは言えないんですよね。

「たまーに、顔出すつもりだから、じゃね」

肩をポンと叩いて俺は蝶屋敷の近くにある森林地帯に飛び込んだ。

「ちよつ——」

うーん、何か聞こえたけどいいか、もう会うことはないでしょうし!

この短い間の良い思い出を振り返りながら——良いこと言おうと思っただけどいい思い出あんまりなかったわ。しいて言うなら原作キャラとちよつと触れ合えたことと弟たちと会えたことぐらい。

猿のように木と木を軽い動きで移動して、適当な町まで向かう。

お礼言うとしたら、体術教えてくれたぐらいじゃんね。

太陽が沈み、月が顔を出している。

「お、久しぶり！」

「？」

何とか町に到着し、道を彷徨い歩いていた俺に声を掛けると同時に肩を掴んだ。

「奇遇だね、隼くん！」

「は？なんでこんなところにいんの？」

そこにいたのは、この辺りでは珍しいスーツに身を包んだ童磨がいた。

「良いじゃないか別に、ここであつたのも何かの縁だ！お茶のみに行こう！」

「いやいやいやいや、何考えてんの？え、肩触らないで、寒気するから襟首を掴むな！おい！」

身長差を利用され、俺は強制的に童磨と茶屋に入った。

「ちよつとした話をしたくてさ、逃げようとしたら…わかるよね？話をしてくれるだけで良いから」

周りの客を見渡してからそう脅すように言うので仕方なく頷く。

「話つてのは？早く、簡潔に頼む」

「簡潔に言おうと、俺たちの陣営に憑かないかって話」

「俺たちの陣営って…鬼だよな？」

「うん」

「え、つくと思ってるの？」

「うん」

「馬鹿じゃん」

「え」

心外とでもいうかのように表情を変えるが感情が無いことを知っ

てるので何とも思わない。

「そもそも、理由がわからない以上、つく気になれない。まあ聞いてもつく気にはならないけど」

俺が鬼陣営についてみる、鬼にされて記憶覗かれたら…鬼陣営の大勝利だ。

え？そうなるのが嫌だったら鬼を狩れ？そんなことしたくないから逃げてるんだよ理解しろ!!

店員が持ってきた水を一気に呷って、俺は立ち上がる。

「逃げないでよ」

「いやいや、逃げてないです。話はしました、断りました。それで終わり！はい、じゃーね!!!」

制止を振り切って店を飛び出した俺は身に着けた身体能力で町の家の屋根に上って極力音をたてないように駆ける。

「ねえ、待ってよー」

「待つ馬鹿がいると思うか、ばーか!!」

「な!?!」

案の定童磨は俺を追いかけて、軽々と屋根上に上ってきた。

「俺は君と友達になりたくてまた会いに来たんだって！あの話はないで！」

「…お前と友達になることは今後一切ない！」

「なんでだい？」

「鬼が嫌いだから、お前のこと嫌いだから、あと…ストーカー気質なのも嫌あー！」

屋根の瓦を崩さないように配慮して逃げるのはなかなか辛い、今後の課題だ。

「これから直すから仲良くしていこうぜ？」

「ちよつと無理い!…あつぶな！お前友達なりたいなら普通攻撃しないでっ！」

後ろを見ながら走っていると氷が飛んできたので避けながら叫ぶ。

「ごめんね、つい」

「つい攻撃するとか大丈夫か!?!」

「大丈夫！」

絶対大丈夫じゃないよね、そう思いながら懐に手を伸ばす。

手に持つのは特製の煙玉。少し前に胡蝶姉妹に対して使用したのはただの煙玉だが今回ののは一味違う。

足を止めると同時に振り返り、無防備に走ってきていた童磨に向けて煙玉を投げつける。

「はい、お前の負け！」

間抜けにも煙玉を受け止めた童磨。

「うわ、何この煙!?!」

煙玉から少々紫色に染まった煙が噴き出し、辺りを満たしていく。雑魚鬼なら吸った瞬間即アウトの毒が混じった煙、でも上弦だから数秒麻痺する程度だろう。だが数秒間止まってくれただけで多分逃げ切れる。

いやあ藤の毒の粉末貰っておいて良かった、感謝感謝。

貰ったのは皆さんご存じ胡蝶しのぶ、何の為に使うのかと聞かれたので適当に最終選別とか言ったらくれた。案外優しい。いや、ちよろいの方が正しいか。

俺は町に泊まりたいという気持ちを抑えて樹々が鎮座する森に入る。

願わくば、鬼に会いませんよーに!!!

出会ったら…静かくに、逃げる! 作戦はいつでもかわらず命大事に

!!

雪景色の中に、ポツンと一軒家。

「うーん、一面雪景色。歩いてもなんも変わらない！ ていうか寒い！」

ぎゃんぎゃんと喚きながら誰もいないはずの夜の雪山を歩く。たまたまに雪が崩れて崖から落ちかけたりするが何とか生き残っている。

いつか死ぬ。死ぬ気は無いけど。

「民家どっかに有ったら温まらせてもらおうかな…」

暫く無言で雪をかき分けて進んで行くと民家がぼつんと鎮座していた。

某テレビ番組に出れそうな場所にあるね、知らないけど。

乱れた服装を適当に整え、民家の引き戸をコンコンコンとリズムよく三度叩く。

暫くすると家中から「はい！ ちょっと待ってくださいね」という元気な声が聞こえた。

「……どうしましたか？」

引き戸が開き、声の主が顔を出す――。

「……え？」

顔を出したのは、この世界――『鬼滅の刃』の主人公の竈門炭治郎だった。

「う、う………」

「ど、どうしま――」

「うそだろおおおおお!!」

この世界に産み落とされて、何度目かわからない大声を俺は口から絞り出した。

俺が落ち着いたところで、家にあけてくれた。

「大丈夫ですか……？」

「ああ、大丈夫だ。すまなかつたな」

「いえ、お気になさらず！」

日輪のような眩しい笑顔を俺に見せると、お茶を出してきた。

「ご厚意に甘えてお茶を受け取り、半分ほど流し込んで頭を下げる。」

「……すまない、突然訪ねて来たと思ったら——」

「本当に気にしないでください！ 顔上げてください！」

俺の言葉を遮って困ったようにする目の前の幼さ残る少年——炭治郎。

俺は頭を上げて、確認するように顔を見つめる。

「か、顔になんかついてますか……？」

「あー、いや、なんでもない」

「そ、そうですか……」

何かの見間違いかと思いたかったが、目の前にいるのはアニメ、漫画ともに嫌と言うほど見た炭治郎だし、声もそのまま。

これで別人でした、なんてことがあつたら俺の目と耳どちらもイカれていることになる。

ほぼ確実に炭治郎だろうが、一応名乗ると一緒に名前を聞く。

「名乗り遅れた、俺は隼。君の名前は？」

「竈門炭治郎と言います」

「そうか。炭治郎、良い名前だな」

「もう遅いので寝ていますが、母と弟と妹がいます」

「父」という単語は炭治郎の口から出なかつた。

つまりは、炭十郎さんはもうこの世界にいないということ。

「ご察しの通り、父はもういません……」

完全に頭から抜けていた、炭治郎は嗅覚が優れていることが、匂いで感情、思考を読み取られることを。

「……そうか、すまなかつた、辛いことを言わせたな」

「大丈夫です、父は俺の中で生きていますから……」

耳につけた花札を懐かしむように触れ、にっこりと笑う。

「お邪魔したな、俺はこれで失礼するよ」

俺が出て行こうとすると両肩を掴んで止めてくる。

「夜の山は危ないから泊って行ってください……!」

「いやいいよ、迷惑をかけるだけだからな」

「でも……」

「じゃー、お言葉に甘えて泊まらせていただけこうかな」

俺がそう言うのと、炭治郎はまた日輪のように眩しい笑顔を見せた。

用意してくれた寝転がり、瞼を閉じようとしていると炭治郎が声を掛けてきた。

「隼さんは何をしている人なんですか?」

「俺は……」

続く言葉が見当たらず、黙り込む。

暫くして思いついた言葉を繋ぐ。

「日本全国を旅してる旅人さ」

「旅人……」

本当は逃げ回っている臆病者だが、言えるわけがない。

炭治郎の目がキラキラと光る、興味津々のようだ。

「色々見て来たぜ、聞くか?」

「いいんですか!」

「もちろん」

色々な話をした。

特産物、食べ物、東京の話……そして——鬼の話。

しようかはかなり迷った、だが言っておく価値はあると思った。

「鬼……?」

嘘だ、とでもいうように表情を曇らせた。

だが俺が真剣な眼差しで見つめているとゆっくりと頷いた。

匂いで本当のことだと理解してくれたのだろう。

「——ま、こんなもんかな」

「……」

鬼のことだと思うことがあるのだろうか、真剣な顔をして黙っている。

「俺、鬼が来ても良いように鍛えます」

「そうか……」

俺は余計なお世話かもしれない、そう思いながらも一つ提案した。

「……炭治郎、疲れない呼吸の仕方って知ってるか？」

「疲れない、呼吸の仕方……？」

俺はにやりと笑ってみせ、詳細を軽く説明した。

「——こんな感じで習得までが超がつくほどしんどいんだが……」

炭治郎は、覚悟を決めたように頷いた。

「俺にその呼吸法を教えてくださいませんか、隼さん」